

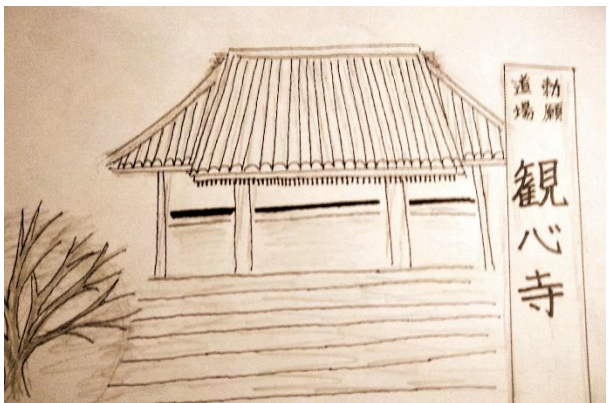
炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

挿絵と文 池内文藏

第3話



観心寺かんしんじは、8世紀のはじめに修験道の開祖・役小角えの おづぬによって建立され、弘法大師・空海が高野山を開くための重要拠点として整備した寺である。本尊である如意輪観音にょいりんかんのんを中心に「人の生死を支配すると伝わる」「貧狼星」「巨門星」「禄存星」「文曲星」「廉貞星」「武曲星」「破軍星」から成る「北斗七星」「ほくとしちせい」が立体の如意輪曼荼羅にょいりんまんだらを構成する。

左近とともに境内に入った瀧りゅうかく覚を、若者たちがそれらの星の如く取り囲み跪ひざまずいた。大きく領いて応える瀧覚を石川源三郎が本堂へと案内する。かれらは楠木党とその傘下の在地豪族の子弟らで、この寺で寝起きして勉学や武術修行に励む。学問の重要性を感じていた楠木正遠まさとおは、水運業に拠よって経済力を強化すると共に、そうやって得た財を次の世代に投資するべく自らが地頭職じとうしきを務める観心寺莊の中心であるこの寺に学問所を創設した。学費はもとより寄宿費も無料りょうで、京や南都から学者や僧を招き、自らも教鞭を執った。そんななか寮長兼学問所の総長を任せていた南都の僧都そうずが高齢を理由に退職。正遠が後任として白羽の矢を立てたのが、美濃の奥地に隠棲する瀧覚だった。

―瀧覚である、みなよしなに―

そう挨拶した後、かれは本堂に集まった数え年十歳から十五歳になる若者たちひとりひとりに名乗りを上げるよう命じた。名乗りは武士の作法の基本である。かれらは戦場で相対した武将に対し、まず互いに氏素性や遠祖からの一族の武勲を自慢した後、弓矢を合わる事でそれだけの膂力を競い合い、最後は一騎打ちで生死を決めた。治承寿永の乱。いわゆる「源平合戦」の源義経を例に挙げると

―われこそは清和天皇第六の皇子貞純親王が嫡子六孫王源経基より四世の孫陸奥守鎮守府將軍八幡太郎義家の曾孫先の左馬頭源義朝が一子源九郎義経なり―

と名乗るのだが、かれはそれまで主に移動手段だった馬を兵器に使い一の谷の戦いに於ける「鶴越の逆落とし」による背面からの急襲で平家軍を半壊させ、壇ノ浦の戦いでは海戦で禁忌とされた水主梶取ら非戦闘員を射殺するという「暴挙」によって平家を西海に沈めた。義経の礼儀作法を無視した振る舞いが、後の合戦に大きな影響を与えるのだが、それ以上に劇的な変化をもたらしたのが、文永十一年（1274年）、弘安四年（1281年）の二度に渡る「元寇」だった。言語の通じない蒙古軍に対し、波打ち際に先陣した坂東武者が―われこそは―と幼少期より磨き続けて来た「名乗り」を挙げている間に、敵船から「つはう」と呼ばれる火薬を詰め込んだ鉄弾が飛来し、頭上で炸裂。さらには敵兵が放った毒矢に拠って瞬く間に多くの兵卒が生命を失った。二度に渡る元寇はいずれも「神風」によって退けられるのだが、御家人たちが生命を懸けることによって敵の没領を下賜される「御恩と奉公」という幕府草創以来の根本が崩れ、以後体制の弱体化が進んだ。

若者たちの名乗りが日の落ちた本堂に飢した。石川、大塚、橋本、八木、神宮寺など楠木氏傘下の河内・和泉の「苗字」が続いた。名乗りは年長組から年少組へと移る。最後列から

―橘朝臣楠木多聞丸―

という名乗りが挙がった。声の主の容貌は前列に阻まれて窺い知れなかったが、透き通った良い声だと感じた。声は続けて「師の御坊の名乗りは」と尋ねた。瀧覚が息を呑んでいる間に

―これ多聞―と石川源三郎が窘めた。